

「スリランカにも、大乘仏教が伝わって栄えた時代があったよ」と、タランガッレ・ソーマシリ師は口にされていた。「いつか、そのブドゥルワーガラにつれていってあげようね」と、約束して下さっていた。スリランカ仏教史によれば、仏教が広く広まったのは紀元前3世紀頃である。インドからアショーカ王の王子マヒンダ長老が来島し、仏教教団を確立したことに始まっている。

少し時代が下がるが、紀元前1世紀頃、その後のスリランカ仏教史に、大影響を及ぼす教団の分裂が起こった。保守派・大寺派、大乘の教えを容認した無畏山寺派に分立し、更に紀元前2世紀には、祇陀林派が起こった。お互いに競合する状況となり、12世紀まで続き、王が大寺派に統一したことにより、スリランカ仏教史の中で、大乘仏教は消滅することになった。仏教が繁栄した背景には、王権と密接不離であったことが分かってくる。

🔥ブドゥルワーガラへの道

2015年3月1日、やっと念願が叶えられることになった。巡礼者の為に設計されたような僧院風のマンダラ・ローセンホテルを出たのは、早朝であった。スリランカの地図を広げてブドゥルワーガラの位置を見ると、ウェッラワーヤとティッサマハーラーマを結ぶ幹線道路の分岐点から、数キロ走ったところにある。10分位走ったであろうか。舗装のされない道路の脇には、草木が密生していた。民家が見えなくなったと感じたと

ころで、野原のような場所に出た。蝶が沢山舞っていた。先を歩く外国人参拝者を見かけた。私たちも車を降りて、先ずは入場料を払って、ぼつぼつと歩き始めた。坂を登ったり、湿地、石橋…など、左の道を歩いて磨崖仏に続く道を500m位進んだ。暑いには暑いですが、多少の木陰もあって、日傘を差していると熱射から免れる。黙々と歩いて、杖



不要で大乘仏教遺跡岩壁前にたどり着いた。ブドゥル・ワーラガラとは、ブドウ(仏陀)、ルワー(像)、ガラ(石)で、それぞれの意味をつないで「石仏」と総称されている。石仏群は私に何を語りかけてくれるのだろうか。

🔥石仏ファンシー

石仏を目前にした瞬間、私は何とも言えない不思議な気持ちにかられた。中国の雲崗や洛

陽・龍門で見た華麗な仏像のイメージではなく、もっと身近な日本の国東半島で出会った、簡素な石仏群に近い印象を抱いた。日本仏教は、中央アジア・中国大陸・朝鮮半島などの北方廻りで広布されたとされている。しかし、ブドゥルワーガラに来てみると日本の大乘仏教は、セイロン・ビルマ・タイ・カンボジアなどの南方から伝播した海のシルクロードから日本列島にたどり着いたのではないかと思えるのである。

人間は生きていく限り、悩み迷い苦しんで何かに救いを見出そうとする。古今東西の「仏教」に熱い注目が集まったのは、仏教の教えの深さの中に生きる答と救いを求めているのではないだろうか。

小乗仏教は、釈迦の直説を中心として編纂されているのに対して、大乘経典は独自の思想的発展が観られる。もっと簡単にいうとすれば、釈迦を永遠不滅の仏様としてこの世に現れたものとらえたり、大衆を救う菩薩の概念を創りだし、多岐多様な経典に纏められて登場する諸仏や人物が多彩を極めている。

ブドゥルワーガラにお参りするためにこうした大乘仏教に由来する、私たち日本人には身近な『浄土三部経』『般若経』『法華経』などの経典をちょっとだけ覗いてみるのも意外に味わい深く楽しい気分になれるのではないかと思う。

🔥菩薩たち

ブドゥルワーガラ仏教遺跡に立つと、誰もが何処かで触れたような波動が伝わってきた。明らかに大乘仏教旧跡ではあるけれど、中国大陸で眺めたスケールの大きさはない。しかしながら、大乘仏教の「一切の人々の救いを目標とする」という教えがそこはかとなく伝わってきた。

巨岩に刻まれた15m位の仏陀の立像左右に少し小さめの仏像が見えた。右側は観世音菩薩で左側は文殊菩薩像のグループに見え、合せて7体である。「菩薩」は、敢えて仏にならず人々を救うために頑張っている存在である。大乘仏教で主流を占める菩薩たちの身体は、ゆったりとした着衣を纏っている。イヤリング・ネックレスなどのアクセサリーも身に付けておられ世俗的である。中でも観世音菩薩が一番身近な現世利益をもたらしてくださる仏様として知られている。もともとの観世音菩薩像は女性なのか男性なのか？性を超越した姿であるけれど、ここの観世音菩薩像はヒンドゥ教の影響を受けてか女性らしい豊かな表情である。一方の文殊菩薩は学力の向上を叶えるような受け止め方をされているけれど…、私は人



間としての徳を高め心を磨く精神界の源だと理解している。

古の民がここに来て「慈悲と智慧」にあやかりたいと願って合掌した情景が浮かんできた。もっと前に近づいてみると磨崖仏の頭上から黒い色が染みだしている。油性のものか？現地の人にはその石仏を拝すると万病に効果があると信じられているらしい。他方に赤い色が付いている立像があり、その昔、色彩豊かな仏群であったのが、年月を刻んでいくうちにかすかな色を残すに至ったのであろう。右の奥の方の仏道に目線が流れた。金剛杵を持っているのは密教像の証明である。密教は7世紀に出来上がり、日本伝来は9世紀前後だと言われている。密教についてもごま祈禱などにエスカレートしていくと壮大な宇宙観が迫ってきた。

周囲に気を廻すと、観光客はいなくなり木の茂みと岩場の石仏群が残され静寂が戻った。私たちはこの空間の広がりや深さの中で生き方の再確認ができるかもしれない。スリランカの文化三角地帯の華やかさはないけれどブドゥルワーガラに根付いた仏教精神を垣間見た気がした。